爆乳女教師、金的逆転

玉子王子　著

一章　気弱爆乳、松井先生

コンビニ。

棚に新作のお菓子を並べる制服姿の男性店員。

立ち上がる、突然殴られる。柔らかいボールのようなものに。相当な質量だ、尻もちをつく。

「きゃっ、すいません！」

ボールの上から声。

顔を真っ赤にする二〇代中盤の女性。美人というほどでもない、やや可愛いぐらい、八の字眉毛が気弱そうだ。しかしそんなものはまるで気にならない。

ボールだ。

特大のビーチボール二つ抱えている。

特大のビーチボール二つ抱えている。

ジャンパーに下はシャツ、普通のシャツなのだろうが、ぶつかった衝撃で何と言うかずれ上がってしまい、飾り気のないブラに包まれた見事な下乳を披露していた。

――うわ、す、すげえ乳。というか、今当たった？　乳単独で当たるか？　でけえ。

「いや、大丈夫ですから」

立ち上がる。立ち上がろうとする。

その店員が再び殴られる。いや、またもビーチボールだ。

頭を下げた爆乳女性のビーチボールが重力で下がり、勢いよく立ち上がろうとした店員の顔に減り込んだのだった。勢いよくぶら下がったのでシャツはさらに上がり、もはやブラを付けた胸が丸出しだ。

飾り気のないブラ。

最近はある程度大きいのでもいいデザインのが出てきているが、さすがにバレーボールとなると日本だろうが外国だろうが圧倒的少数派。

したがってなかなか売れるものではなく、メーカーもあまり力を入れられない。

再び尻もちをついた店員。見上げてブラ丸出しに気づき再び唾をのむ。

――うお、デケエ。あ、やべ、立つ、鼻血も……当たったからか？　興奮して？　さすがに当たったからだよな。っていうか谷間、寄せて上げた人造谷間はＹ字で、天然谷間はＩ字だっていうけど、これはもう谷間っていうより密着しちゃってるよ。ヤベえよ。

「すいません、鼻血が……」

「いや、大丈夫ですから」

二度の爆乳事故にブラ丸出し、谷間を見せ付けられて立てなくなる店員。立ったので立てない。

平謝りする爆乳女性を、奥から出てきた別の男性店員とともに鼻血の店員がなだめる。

「どうぞお気になさらずに」

「この鼻血は別にぶつかったからじゃないんで」

「え、お前……っていうか、お客様、シャツが」

「え？　きゃあ！　す、すいません！」

真っ赤になってシャツを下す。が、もともと爆乳を隠すには布が足りないのか、慌てて無理やり下した成果、手を離すと瞬く間に引き上がってブラ越し爆乳が丸出しに。

「うわっ」

――どんだけデカいんだよ。ヤベえ、立っちまう。

あとから来たほうも思わず腰を引く。

その様子に、さらに顔を赤らめる爆乳女性。

「ああっ、す、すいません、変な物見せちゃって」

「いや全然、すごいですし」

「やだ……」

顔を赤らめて目を逸らす爆乳女性。

恥ずかしさのあまり踵を返し、自動ドアの前に立とうとして胸がぶつかる。

――おいおい、昨日今日爆乳になったわけでもないだろ。慣れてそれって、ドジっ子体質でもあるんだろうけど、やっぱりデカすぎる。うわ、揉みたい……

鼻血店員がそう思いつつ、飛び出していく爆乳女性を見送る。

走り、大きめのバンに飛び乗る。

女の上に気弱なのだから舐められないように、という友人の勧めであまり運転がうまいでもないのに大きな車を買ってしまった。

ビー、とクラクションが鳴る。なぜ鳴ったのか。

「あー、もうやだっ！」

ビーチボールの持ち主は当然理解していた。背を逸らし、爆乳をクラクションから放す。

体自体はむしろ華奢で、中学ぐらいまでは小柄といわれていた松井静香の身体イメージはそのころと変わっていない。

基本大して変わっていないのだ、背もほとんど伸びていないし。ただ、一部分だけ恐ろしいほど肉付きがよくなった。

中学以降増えた体重は全部そこに次ぎこまれたと彼女は信じていた。

胸がないころの身体イメージで動くのは結局運動に向いていないタイプだからだろう。中学までの時間よりもそれからの時間のほうが長いのだからこちらに慣れないのはおかしい。

が、慣れないのだから仕方ない。

あまり自分の爆乳が好きではないから、受け入れたくないということもあるのかもしれない。

男が「自分のモノが大き過ぎて困る、好きじゃない」などといっても**一億パーセント嘘に決まっている**が、乳房となれば邪魔と感じる者も実際にいることだろう。

いや、邪魔というのは言い過ぎでも、松井に取って多少重荷なのは事実だ。

――ああ、スイカぐらいの**小ささ**だったら楽だろうに……

実際他の女性の前で口にしたら**クソマウント扱い**しかされないことを本気で考える。

考えつつ、隣のコンビニへ。

中に入ると、男の子が数人いた。小学校低学年ぐらいだ。

「あ、松井ちゃんだ」

「松井ちゃんオッスオッス」

「あ、みんな帰り？」

ひく、とちょっと頬を引きつらせて笑う松井。

「買い食いとかはだめだよ」

「あはは、松井ちゃん先生みたい」

「せ、先生でしょ」

宝典小学校という適当につけたような名前の学校の三年Ｃ組担任。

男子三人は生徒だ。

三年となれば一〇歳とか九歳で、松井の半分も生きていないし。体重も半分以下だろう。

それがニヤニヤしながら「松井ちゃん」だ。舐めている、溶けて無くなるほど舐めている。

「ていうか松井ちゃん、いつも大きいね」

「な、何言ってるの」

恋人もいて、当然経験者であるのに顔を赤らめる松井。かわいいといえばその通りで、舐めるというよりかわいくてからかっている面も相当ある男子たちだが、まあそれはそれでやはり舐めているだろう。

胸を両手で庇う。しかし庇いきれる大きさではない。

空いているところを指でつく男子たち。

減り込む。

――柔らかいなあ松井ちゃんは。初め触った時は、刺さって痛いんじゃないかと心配したぐらいだもんね。

埋もれる指。いや、手首まで埋もれると思えるほどだった。

周りから触りまくる三人。

「ちょ、ちょっとやめなさい！」

「いいじゃん松井ちゃん」

「減るもんじゃなしさ」

「あ、あっ」

――こ、このガキども。こんな子供に。触らせる気もないのに、人前で勝手に……

羞恥と屈辱から興奮に似た感覚を感じさえする。それはわずかなものだが、あってはならないという禁忌の感覚が逆にそれを大きくしてしまう。

それでも、手で押せば一〇歳男子など、二〇代女性が押しのけられないわけもない。

「こ、こら、いい加減にしなさい」

「はーい」

「冗談だよ冗談」

「ぎゃははは！」

笑い、ちょっと腰を引いてコンビニを出る三人。

大きくため息をつく松井。

と、ギョッとする。

あっけに取られて見ていた客の中に、女児が四人ほどいたのだ。皆スカートで、上はキャミソールや普通のシャツ。薄着だが胸らしきものは微塵も確認できない、胸より腹が出ている純正幼女体型のロリたち。

「あ、あなたたち」

「先生、ああいうの止めてもらっていいですか？」

「え、なにを？」

「この中にさあ、田中くん好きな子がいるんだよ。っていうか、ましな方の男子は大体誰か女子に好かれてんだよ。わかる？」

一〇歳女児らしからぬ話し方。

中島あかり、ぱっちりした目の気の強そうな女児である。青系の明るい色のスカートに同じくキャミソール。首元の空いたキャミソールは上から見るとタイミングによっては胸から腹までフラットに見下ろせる、服が邪魔することはあっても、胸が邪魔することは皆無。胸などない。

とはいえ、決して男のように硬そうではない、むしろすべすべした低反発枕かなにかのような、むっちりした柔らかさを備えているように思えた。

まあ中島に限らず、女児の体など全体的に柔らかいのは当然で、それこそ膝や肘、脛までぬいぐるみのようにふんわり柔らかいのではないかとさえ思えてくる。

ともかく、そんなガチロリの語る「田中くん」は、さっき痴漢行為をしておきながら冗談で済ませて去って行った男子の一人である。

　この場にいるグループの一人が彼を好きなのだ。好きといっても「恋してる自分」を楽しむための好きでしかない。が、まあそれでも好きは好きだろう。

　それはわかるが、なにを言われているのかはわからない松井。

「えーっと、つまりどういうことだってばよ？」

　言われて、舌打ちする中島。眉をしかめる。

「だからよお、クッソだらしないおっぱい触らせて男子のご機嫌取ってんじゃねーってことっすよ。性別逆ならタイーホだからね、タイーホ」

「え！？　ちょ、何言って……」

「男子はアホだから、おっぱい触れるとなるとダボハゼみたいに食いつくから、面白いのかもしれないけど、まじめに恋愛やってる若い子の邪魔をおばちゃんがやるとかダサいってことっすよ」

　なんだかわからない理屈。

　そもそも、嫌がっているのに無理やり触られていたのだ。

　それを、同じ女性である女児たちに曲解されてむしろ加害者扱いで批判される――加害者というより、迷惑行為をやっている奴、という感じかもしれないが。

　――え、なに？　何言ってるのこの子たち？　私、痴漢にあったのよ？　それを男の人に叩かれるならまだしも、同じ女にそんな……ありえない、ありえないでしょ……こんなの。

　呆然と立ち尽くしている間に女児たちは去っていく。

　うつむく松井。

　涙をこらえつつ、とにかく買い物。

　と、またも爆乳事故。

　ギャルっぽい女子店員を突き飛ばしてしまう。

　松井の前ですーっとモップをかけていたが、急に立ち止まった。

　本来の松井ならさすがに自分も止まるが、生徒らからのひどい扱いに心がぐちゃぐちゃで反応が遅れた。それでも本来なら当たらないはずだが、松井のバストは爆乳ゆえに不思議の事故を引き起こし、見事ギャルを吹き飛ばしてしまう。

「うげ！」

　喚き、つっころぶ金髪少女。

「ひいい！　また……ごめんなさい」

　立ち上がるギャル風少女。険しい顔で振り返る。

　と、すぐに前を向く。

「坊主大丈夫か？　あ、お客様、私は平気っスから」

　彼女が急に止まったのは、棚の横から子供が出てきたからのようだった。

　倒れた自分より子供を心配し、ついで客を振り返る。

「すいません、胸が」

「あ、それじゃ当たりますよね。大丈夫っすよ。っていうか、気を付けてくださいよ。お姉さん、なんか気弱そうで……変なのに目を付けられたり」

「そんな、子供たちを変なクズだなんて、私は全然」

「……いや、子供とも、クズとも言ってませんけど」

　目を伏せる松井に、頬を引きつらせるギャル系店員。

ともかく、今度は流血もないのでそこそこ謝り、買い物に戻る松井。

釣銭を受け取り、少し顔を曇らせる。

――あれ、これは？

レシートだと釣銭は六〇〇円だが、百円玉が二つしかない。

一つ五百円玉と間違えたか。

「その……」

「え？」

レジの男性店員が不思議そうな顔をする。

「あ……」

――ちゃんと渡した、って思ってるんだ。それじゃいちゃもんつけてお金取ろうとしてると思われるかも……五〇〇円ぐらい、いいよね。いや、四〇〇円か。

「いや、何でもありません」

項垂れて踵を返す。後ろに並んでいたピアスをした男がチラリと松井の爆乳を見る。

自動ドアに今度はぶつからず、外に出る。

――ああ、今日はひどい日だったなあ。ぶつかるし、おっぱい触られて、私が悪いみたいに言われて……またぶつかっちゃって。あの人、見た目は怖い感じだけど、いい人でそこだけよかったけど……

項垂れ、周りを見ずに歩く。

自動ドアが開く音が後ろでする。

出てきたのはピアスの男。

――やっぱりすげえ爆乳。後ろから乳見えてるし。っていうか、見えてる部分だけで彼女の乳より体積あるぜ！　ヤベえよ……ヤベえよ……

懐に手を入れる。

冷たい感触。小ぶりなナイフだ。

――へへ、釣銭貰い損ねたのに言えない気弱な女……こういうやつは経験上、犯して写真撮ればダンマリなんだよな。お、あのバンに乗ってんだ。ああいうトロそうな女ほどデカい車乗りますねー、へタクソのくせによ。よしよし、中でおレ〇プの後、車は没収で行こう。

ゆっくりと近づく。

車に向けて鍵を出す松井。ガチャ、とロックが開く。

車の扉を開ける。

自動扉が開く音とともにピアスの男が走る。

「え？　きゃっ！」

「おらっ！　おとなしくしろ！」

「な、なんなんですかあなた！？」

「俺はお前の彼ピッピでーす」

言いつつ、松井のジャンパーを掴んで引っ張る。

コンクリートの上に転がる松井。

「な、なにを……」

「スマホ出せコラ。早くしろ」

「な、なんで」

「お前拉致ってレ〇プするからに決まってんだろ？　え、なんだお前」

　ニヤニヤ笑っていたピアスの男が顎を上げる。

「コンビニの店員だよ。この腐れキ〇タマが」

　ずかずかと近づくギャル風の店員。

「へ、女のくせにデカい顔しやがって。ギャルってみんなそうだよな。なに？　男より強いつもりか？　お前らがデカい顔できるのはなあ、男が手加減仕手やってるからなんだよ、勘違いすんなこら。ぶん殴られたくなかったら消えろ」

「お前馬鹿か？　私がここで「はい消えます」っていって、警察呼ぶほうがお前終わりじゃん」

「あ！　そ、それじゃお前ら二人とも浚うしかねえな！」

　わめき、突っかかる男。

　と、のけぞる。

　バシ、と何かが顔に当たる。五〇〇円玉。

　少し離れたところから見ていて、釣銭間違いに気づいて慌てて追ってきた。

　都合のいい話だが、まあそれはどうでもいい。

　頭から飛び込むギャル。

　手を伸ばし、勢いよく男に触れる。

　ジャンプパンチか、といっても、そんな無茶な攻撃法もない。大した力も入らなかった。触れれば勝てると思っているかのようにリーチを最大限に伸ばした感じだ。

　どさ、と駐車場のコンクリートに落ちるギャル風店員。

　すぐ立ち上がる。

　その前で、男は腰を引く。

「は、ぐうううう、お、おまえええ」

　ニマ、と笑って首をかしげるギャル。

「おんやー？　どうしたのかな？　お強い男性様が、今の私の手を伸ばしただけのパンチで、そんなダメージ受けるわけないよね？　男性様が！」

「く、くうう」

　顔を赤らめ、膝を締める。

　抑えるのは股間。

「え、ええ？」

　駐車場に座り込みつつ、口を押える松井。

　――え、やだ……もしかしたら当たったの？　男の人のあれ、弱点に？　タマタマ？

「ぷっ、やだ」

「あ、お、おまえ」

「ぎゃはははは！　そりゃ私ら女の子からしたら、笑いごとっすよ、「タマタマが痛いのー」なんてね？　しかも、レイパーの腐れタマタマならなおさらね。っていうか潰れろ！　大丈夫、潰れたってうちで好評販売中のナノ薬がありゃ、一発再生だから」

　ナノテクノロジーが発達し、睾丸ぐらいなら秒で治せる経口薬が安く売られている世界である。

「あはは、キ〇タマは潰れても治る。なら悪い男に女がやるべきことはキ〇タマ潰し一択っしょ。

ぶっちゃけ、私らみたいなギャルでキ〇タマ蹴ったことない奴って一パーセントいないと思うし、潰した経験者も半分超えるって絶対。ついでに言えば女でキ〇タマが男の弱点って知らない奴はゼロパーだっての」

「な、な」

「そこのお姉さんも知ってるでしょ？　ほらね。女はみんな知らないふりしてても、全員あんたらのお股が弱いこと知ってんだぞ。なのにあんた、隙ありすぎでしょ」

「このクソマ〇コ……舐めんじゃねえぞ」

「はいはい、おキンキン蹴られた男ってみんなマンマンの悪口いうよねー」

　青ざめつつ、男はまだ戦意を失っていない。ギャルのジャンプパンチは本当に当てるだけで、女が受けても顔面でもなければダメージなどありえない威力だったのだ。

　それでも睾丸だけはダメージが出てしまうが、いつまでも行動不能ではない。

　震えつつ、男は右手をズボンのポケットに入れる。

　すっと、近づくギャル。

　男の空いた左手を自分の右手で押さえるというか、股間を庇えないように邪魔する位置に右手をつき込むことで制する。

　そして左手を下から振り上げ、カップで股間を押し潰す。

「はぐっ！」

　カップが来るとみると、男は当然反射的に守ろうとした。しかし左手はギャルの右手で止められ、自分の右手はポケットである。

　無防備に金カップを食らう形となった。

　唾を飛ばすギャル。

「ぎゃははは！　ちょ、だからタマタマ守りなってあれほど！」

「こ、このクソメス……あ」

「きゅっと」

　カップをそのまま握るギャル。

「あ、ちょ」

「動いたら握り潰すからね？　タマタマ。あは、なんかあんた、玉も竿もしょぼくね？　パンチで縮んだんですかね？」

「そ、そう……はぐっ！」

「ほれほれ、本当はどうなんだよ？」

　ピアス男の小ぶりな玉がギャルの手の中で圧縮される。つま先立ちの男。必死で叫ぶ。

「も、元から粗チンです、粗チンですううう！」

「ぎゃははは！　まあ縮んでるってレベルじゃねーもんね、コレ。じゃ、手を挙げて」

「も、もう許して……」

「まあ、これ以上やるのはかわいそうだから、許してやるよ。ほら、手をあげな」

「は、はい」

　――甘いぜクソマ〇コ。ここで働いてることはわかってんだ、あとで仲間連れてきて復讐だ。犯しまくってやる。

　手を挙げる男。

握っている手を離し、即座に膝金蹴りのギャル。

「あがっ！」

仰け反り、その場に倒れて股間を押さえてうずくまる男。

「く、ぐむううう」

唇を噛み、震える。汗を噴き出す。本格的に金的のダメージで体調を崩していた。パンチもカップも、女なら平気な程度の打撃でしかない、金握りとなれば女には無効の攻撃でしかない。

しかし今の膝蹴りは女でもダメージを受ける勢いだった。まして睾丸がある男となれば一発で身動き取れなくなる。

「あ、あの……」

「お姉さん、大丈夫だった？」

不安げに立ち上がり、横に来ていた松井に笑いかけるギャル。

「た、助かりました！　すぐ警察を！」

「え、まだいいよ。こんな悪い奴はもっと苦しめてやらなきゃ」

べろりと唇を舐めるギャル。

懐からビンを取り出す。中には、ナノ薬がいっぱいだ。

汗を噴き出す男の前でしゃがみ、顔を覗き込むギャル。

「おい、あんたがちょっとや、そっとじゃ後悔もしないってことはわかってんだよ」

「きゅ、救急車……」

「あはは、呼ぶわけねーじゃん。玉竿磨り潰しても、この薬一粒で治るんだから、呼ぶ意味ないって」

「ぐむううう、っていうか、そういう世界なのになんで救急車がちゃんとあるんだ？　あぐっ！」

「はいキンテーキ、めんどくさいこと言い出す野郎は大事なボールにお仕置きよ」

仰向けにして、庇う手ごと拳で叩く。小指側を叩き付ける鉄槌という形。机をどんどん叩く感じだ。

「くんむううう」

「う、うわああ。すごい苦しそう……」

「あはは、これからもっと苦しむよ。男に生まれたことをガッツリ後悔させてやるんだ、女からの容赦のないおキンキン攻撃でね。っていうか、女だからこそできる、容赦のないタマタマ責めでね」

――こういうカスは半端なことしたら仕返ししてくるからね。玉磨り潰す勢いで、二度とレ〇プとか言い出さないように教育してやるのが本人のためでしょ。それに……えへ、私、玉潰し好きだし！いい口実くれてサンキューレイパー！

趣味と実益的なことを考えつつ、表向きは実益部分だけを押し出していくギャルだった。

体験版終わり

これから女教師の覚醒が始まります。

馬鹿にしてくれたクソガキたちは、男子は金的でわからせられ、女子たちはそれを見て掌返しで一緒に金的祭りを楽しみます。

お仕置きで男子たちがフルチンにされるＣＦＮＭ展開もあり。

続きは製品版でぜひお楽しみください